

高次脳機能障害を呈した患者の排泄動作獲得に向けての取り組み ～学習行動理論に基づいたアプローチを通して～

前岡伸吾¹⁾

1) 天理よろづ相談所病院 白川分院

キーワード：排泄動作 高次脳機能障害 学習行動理論

【はじめに】

今回、排泄動作の獲得に困難さがあった左片麻痺患者に対して学習行動理論に基づいてアプローチをした結果、排泄動作が獲得した為、経過を踏まえ報告する。なお、発表に際し本人、家族に同意を得ている。

【事例紹介】

70歳の男性、同窓会のスピーチ中に右視床出血を発症、保存的に加療され、48病日目に当院回復期病棟に入院となる。

本人の希望は歩けるようになり、妻と2人で生活できるようになることであった。

【作業療法評価】

身体機能はBr-stage 左上肢Ⅲ、手指Ⅱ、下肢Ⅲレベル、感覚は表在、深部とも軽度鈍麻で左上下肢、手指、背部の筋緊張が高かった。認知機能は机上の検査では問題なかったが観察では多弁、注意散漫が目立ち、性急で車いす自走時には物への衝突、移乗時はフットプレートに足を乗せたまま立ち上がろうとする場面が多くみられた。また、急な予定変更に対応できずに怒鳴るなど感情のコントロールが難しい場面もあった。起居動作は軽介助レベル、ADLはFIM83点で食事、整容は可能、更衣や入浴は全介助、排泄はズボンの上げ下げや後始末は全介助でナースコールを押しても対応が遅いと苛立ちを募らせていた。

【計画及び経過】

1 期目（入院11日目～45日目）

座位や立位などの訓練と並行して、まず、排泄動作を工程分析し、課題を列挙し、一連の工程をスモールステップで獲得していく事とした。つまり狙いとする課題以外の工程においては全て介助し、一工程獲得したら次の工程に移り、達成工程を積み重ねていくことを行った。また、難易度の低い工程から取り組むこと動作前に注意するポイントを口頭で伝えるようにした。本人の獲得スピードに合わせた事で工程が積み重なり、訓練場面での排泄動作が獲得できた。

2 期目（入院46日目～71日目）

訓練場面で獲得できた能力を実際の生活場面でできるかを訓練した。新たな工程が増えたが1期目同様に、進めたことで混乱すること無く一連の動作が獲得でき、排泄獲得に至った。

【結果】

入院時と身体機能は変わらず、左上下肢の筋緊張が強くなっていた。動作観察では多弁、注意散漫はあるが動作の性急さは無くなり、落ち着いて行動するようになった。基本動作は自立し、ADLはFIM98点となった。食事、整容、更衣や排泄動作は自立し、入浴は洗体、洗髪は一部自身でできた。歩行は杖にて100m程度であれば自立し、178日目に自宅退院となった。

【考察】

今回、複数の高次脳機能障害を合併していた患者に対し、本人のキャパシティを考慮しながら学習行動理論に基づき工程を細分化し、手がかりや教示の方法を工夫しながら進めた。その関りにより自尊心を傷つけずに排泄動作に取り組め、獲得に至ったと考える。